Ｎｏ．２９３【２０１８年２月９日配信】
戦後の国土緑化運動と青森（担当：鈴木）

こんにちは！　嘱託員の鈴木です。

歴史資料室では、現在「山林に抱かれた青森―林野行政を中心に」の館内展示をしております。青森の木材といえばヒバが有名ですね。明治 19 年（1886）に大林区署が置かれた青森市には、津軽半島の豊かな木材が森林鉄道によって運び込まれ各地に送り出されました。今回は、歴史資料室が所蔵する山林に関する資料と解説、関連図書の展示を行なっています。今週はそのうち、戦後の緑化運動についてご紹介したいと思います。

沖館にあった秋田木材水中貯木場
（歴史資料室蔵）

内真部のヒバ林
（歴史資料室蔵）

第二次世界大戦のあと、全国の山林は戦時中の木材の動員や敗戦直後の乱伐によって荒廃していました。

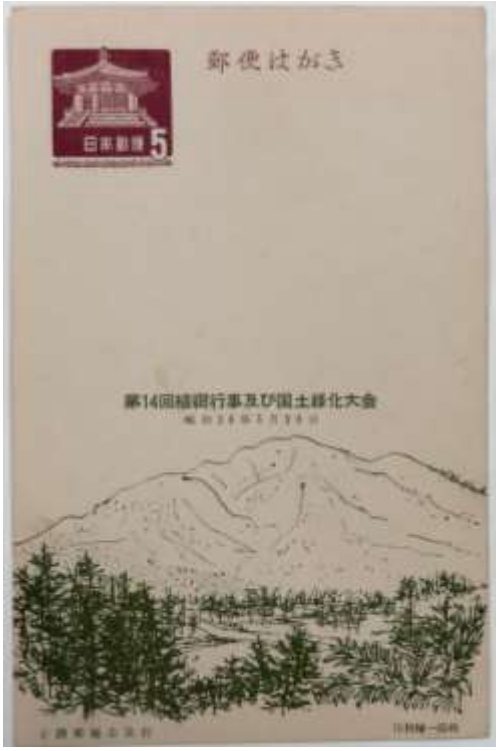
そこで山林の復旧を目指し、「荒れた国土に緑の晴れ着を」のスローガンのもと、国土緑化推進委員会（現国土緑化推進機構）と開催地の共催で「植樹行事並びに国土緑化大会」が毎年開催されるようになりました。これは昭和 9 年（1934）に大日本山林会を中心に始まった緑化運動のひとつ、「愛林日」の記念植樹を引き継ぐものです。昭和 25 年の第 1 回大会（山梨県）のテーマは「荒廃地造林」でした。

やがて戦後復興が進み、高度成長期には住宅ブームによる建材やパルプ原料などとして木材需要が高まりました。また、家庭での燃料が薪炭から石油燃料に変化したこともあり、成長が遅く硬質で薪炭に適した広葉樹の天然林を伐採した跡地に、成長が早く加工しやすい針葉樹を植林する「拡大造林」政策が進められるようになりました。

ちょうどその頃、青森県で第 14 回大会が開催されました。テーマは「粗放林野の拡大造林と生産力増強に基づく住民所得の向上」です。

昭和 38 年 5 月 20 日、平内町小湊の夜越山麓において、国土緑化大会が県内外の招待者ら約 11,000 人のほか、多数の関係者・参観者が出席して開催されました。続いて、昭和天皇と皇后をお迎えして行われた植樹行事では、県内の各市郡及び関係機関に割り当てられた 6 ヘクタールの会場に、十和田市相坂の県営苗畑で育てられた 27,000 本の甲地アカマツが植林されました。青森市は、会場東側の 0.42 ヘクタールを割り当てられています。

今回の展示では、この緑化大会の決議文、大会記念のりんご・ネブタ、津軽凧・八幡馬が描かれた布巾、洋画家の川村誠一郎氏のイラストが描かれた記念はがき（青森県郵趣連合・小湊郵趣会発行）を紹介しています。



植樹行事並びに国土緑化大会記念はがき
（歴史資料室蔵）

その後、この行事は昭和 45 年に開催された第 21 回（福島県）から「全国植樹祭」と名称が変わり、さらに昭和 52 年からは、緑の森を次世代につないでいく「全国育樹祭」も行なわれています。そして、今年の第 69 回植樹祭（福島県 2 回目）のテーマは「育てよう　希望の森を　いのちの森を」。大会テーマの変遷に、私たちが森林に求める役割の変化が感じられますね。